

もう こうねん どうてい のぞみ ちようじようしやう たてまつ
孟浩然の「洞庭に臨み張丞相に上る」

報告:花岡風子

今回のお題は孟浩然 (689~740) の「洞庭に臨み張丞相に上る」という律詩でした。孟浩然と言えば「春暁」。「春暁」と言えば孟浩然というほど、有名な詩人で、二百首あまりの作品を残していますが、その中で最も有名なのは「春暁」です。

孟浩然是盛唐の詩人、特に山水詩に長じていました。同じく田園詩人の王維とともに「王孟」と称されることもあります。玄宗皇帝に仕え、役人として活躍することを切望しながらも、終ぞその望みは叶わず、郷里の鹿門山に隠居して、51歳で亡くなりました。

この詩は、孟浩然より一回り年上の友人、張九齡に贈り、張九齡の推薦を得て玄宗皇帝にお仕えしたいという気持ちを表したものだと言われています。この時、張九齡は玄宗皇帝の丞相(宰相)でした。張九齡と孟浩然、王維の3人はそれぞれ一回りほど年齢差がありましたが、一緒に詩を詠み、酒を酌み交わした所謂「忘年之交」だったようです。

この詩「洞庭に臨み張丞相に上る」を書いたのは、733年、44歳の時でした。当時孟浩然是長安で仕官の道を求めていました。張九齡は孟浩然を玄宗皇帝に引き合わせようとしてくれますが、肝心な時に身を引いてしまい、なかなか接見できません。

ただ一度だけチャンスがありました。それは友人王維がこっそり孟浩然を役所に連れ込んでいた時のことです。その時たまたま玄宗が王維の役所に現われたのです。お咎めを恐れた王維は孟浩然を隠そうとしたのですが隠しきれず、やむなく彼を玄宗に紹介しました。孟浩然の名を兼ねてから耳にしていた玄宗は喜んで、孟浩然に詩を見せるよう命じました。

とっさのことに驚いた孟浩然是『歳暮帰南山』(歳暮南山に帰る)と題する詩を一首進呈しました。その中に「不才明主棄」(才能がないから、主君に見離された)という一句がありました。それに目をとめた玄宗皇帝は立腹し「卿自不求仕、朕未嘗弃卿、奈何诬我？」(お前自ら、仕えようとしなかったのであり、朕が捨てたわけではないのに、何故に朕を恨む?)と言って立ち去ってしまいました。結局、官吏になる道は閉ざされてしまいました。「自分は才能がないから捨てられた、とへりくだったつもりが、皮肉なことに本当に捨てられちゃったんですよねー」と植田先生。

或いはこれはかつて科挙に落第したときの作で、「明主に棄てられた」とは、「己の力不足のため試験に落第し、陛下のお役に立てなくて残念だった」ということを言いたかっただけのことかもしれません。だとすれば玄宗の誤解ということになりますが、いずれにしてもここでこの詩を持ち出したのは大失敗でした。

「但しこの話は『新唐書』孟浩然伝に記載されたものがもとになっています。どこまで真実か確証はありませんが、このタイミングの悪さ。この詩人の生きざまをよく表していますね」と植田先生。

そんな背景を知った上で、詩の音読練習に入りました。

lín dòng tíng shàng zhāng chéng xiàng mèng hào rán
臨洞庭上張丞相 孟浩然

bā yuè hú shuǐ píng
八月湖水平
 hán xū hùn tài qīng
涵虛混太清
 qì zhēng yún mèng zé
氣蒸雲夢澤
 bō hàn yuè yáng chéng
波撼岳陽城

yù jì wú zhōu jí
欲濟無舟楫
 duān jū chǐ shèng míng
端居耻聖明
 zuò guān chuí diào zhě
坐觀垂釣者
 tú yǒu xiàn yú qíng
徒有羨魚情

八月湖水平らかに
虚をひたして太清に混ず
気は蒸す雲夢の沢
波は撼かす岳陽城
濟らんと欲するも舟楫無く
端居して聖名に恥ず
坐ろに釣を垂る者を観れば
徒らに魚を羨むの情有り

これは、律詩ですので、二句ごとにまとめて一つの聯とします。最初の二句を首聯、次を頷聯、その次を頸聯、最後を尾聯といたします。では、首聯から意味をみてみましょう。

首聯：旧暦八月の洞庭湖は、増水のため岸辺が隠れて水面が平らかに見え、湖の窪みは満々と水を湛えて大空に接し、薄靄に覆われて湖面と空の色が混じりあって見える。

頷聯：靄は雲夢沢（昔長江中流域にあった巨大な沼沢地。洞庭湖もその一部）一帯に立ち込め、ひたひたと打ち寄せる波はまるで岳陽城を揺るがせているかに見える。

頸聯：ところが、湖を渡ろうにも、船も舵もなく、何もしないでただぼんやりと平生を過ごしているこの私。聖明なる天子様（玄宗皇帝）に顔向けできず、実に情けない。

尾聯：為すこともなくただぼんやりと、釣り糸を垂れている人の姿を見ていると、魚を羨む気持ちが故もなく起ってくる。

首聯、頷聯で洞庭湖とその周りに広がる広大な湿地帯の雄大な景色を描写しています。

頷聯と尾聯では打って変わって、玄宗皇帝に仕えたいと思いながら何もできない自分の不甲斐なさを嘆くような内容になっています。「前半で玄宗皇帝の素晴らしい唐王朝の治世を、洞庭湖の雄大な風景に見立てていますね。唐が最も栄えた時代を連想させます。ところが、後半はなんかウジウジとした人間の姿が浮かんできま

すねえ。このコントラストが面白いですね。」と植田先生。

前半は玄宗皇帝に対する強い憧れ、そして自分もその配下に入って、世の中で活躍してみたい、という作者の純粋な気持ち。舟と楫とは、広大な洞庭湖を渡るための手段。それが無いということは、かくも偉大な君主に仕えようにもそのツテがないという状況を暗示しています。聖明とは、天子の尊称です。「垂钓者」とは、太公望呂尚のことです。ここは、周の文王と太公望呂尚の出会いが典故になっています。

呂尚が釣り糸を垂れているところに文王が現れます。ふと見ると、呂尚の釣り糸には釣り針が付いていません。呂尚は、文王という魚を釣ったのであり、文王は、呂尚という有能な軍師を得た、という有名なエピソードです。

最後の句は「魚になりたい」という意味にも取れるし「魚を釣り上げる漁師になりたい」とも取れます。後者なら「官位を釣り上げたい」という気持ちを表し、別の典故^註もありますが、ここでは、才能を認めて自分を引き上げて欲しいと友人に送った詩ということから、どちらかというと「魚になって釣り上げられたい」という気持ちが強かったのでは、と推察されます。そう解釈することによって、この詩人の切ない思いが「徒（いたずらに）」の一字と相まって、いや増しに伝わってきます。

「孟浩然という人はね、最初は仙人になりたかったんですよ。というのは、孟浩然が生まれたのは則天武後の治世の安定期でしたが、青年期は武後の晩年以降、武後の息子中宗の嫁である韋后が権勢を振るい始めた時代で、かなり酷い時代だったんですよ。だから、そんな王朝に仕官するより隠遁生活した方がまだ、と思ったのでしょうかね。これも素直な気持ちでしょう。ところが、玄宗皇帝の時代になって、王朝がかつてないほど安定して隆盛を極めたので、ムラ

ムラと世の中に出たいという気持ちが湧き上がってきたのですねえ。でも、そこを玄宗皇帝に見透かされてしまったというか、とにかく嫌われちゃったんですね。玄宗皇帝に仕えたい。でも、孟浩然もプライドがあるから、なりふり構わず、というワケにいかない。ちょっと引いてかかるというかね、謙虚に振る舞いたいんですね。俺は天才だ、という雰囲気李白とは違ってね。二人は無二の親友でしたが、性格はずいぶん違いますね。うーん、こういう性格の人、いると思うんですよ。私もちょっとそういうところあるかなあ、なんて思うんですがね」。植田先生の解説とユーモアに一同から笑い声が止まりません。

「この詩は大きく出て、小さくまとめる、というかね。本当は逆がいいのでしょうけどね。気取らず飾らず、ごく自然に自分の弱みを詩の中に曝け出す。そこに彼一流の美学を感じます。孟浩然は杜甫ともちょっと違って、社会性には欠けますが、何かこう人間臭いところが魅力ですね。ただ孟浩然にとって幸せだったことは、楊貴妃にのめり込んでいく玄宗皇帝の醜い姿を見る前に世を去ったことでしょうかね」。

植田先生の解説のお陰で、かの有名な「春暁」の作者も、ウジウジしたところのある人間味のあるオジ様にみえてきました。思い返せば、アラフォー女子もかつて清貧な晴耕雨読の田舎ライフに憧れていた若い時がありました。でも、今、あの頃の自分に対しては「もっと勉強して、広い世界に出ろ！」と言いたいので、素晴らしい君主の治める新しい社会に身を乗り出したくなった孟浩然の気持ちも分かります。

しかも、年齢的に孟浩然が世を去った時期に刻々と近づいている昨今、焦りと諦めが縋い混じったような複雑な心境も想像がつかます。

千年も昔のこと、孟浩然は田舎に隠居して仕官を諦めましたが、今は人生 100 年時代なのです。50 歳になっても、あと 50 年生きられる可能性もあるのです！

つべこべ言わず、勉強をしたら、なん歳からでも、チャンスはあるかもしれない、と自分に言い聞かせる今日この頃です。

[注] 臨河而羨魚，不如归家织网：河に臨んで魚を羨むは、家に帰りて網を織るに如かず＝魚が欲しければ家に帰って網を編め。手段を見失っては、事は成就しない。『淮南子』説林訓。